復讐
奇談

安積沼

五

へ遠13
1846
ケ止

門 遠13
1856
巻 5上

本河

小幽小平次死霊物語

復讐安積沼 巻之五

東都 山東庵京傳著
門人 拜田 泥牛校

第九條

蒿雀品窟賊醫屠人肉事
并 墮活地獄美女嘆薄命事

ゆゑ。羽州男鹿山に。蒔田翻冲といふ。外料の醫者あり。此男の
庵山といふ。羽州の東北にあり。海中にさゝる地にて。おなじく西山
のごとく。絶景の勝地なり。此山中に赤神山といふあり。山上に蘇
五郎のうち。一座は漢武帝を祭る。一座は蘇武を祭る。余の三座は蘇
邦の神なり。此海のむかひは匈奴の地にて。蘇武が牧羊は此男鹿
なりと云。此山のうち第一の奇境と見るべし。蒿雀品窟なるべし。抜

彼翻冲と云者、嘗一本の秘方を得て、医道大に世をあらし、世地[illegible]
ぶしを通じ、遠く他郷より往来の便あれども、所々に別家[illegible]
あきて、廣療治を施されぬる奇疾異瘡、[illegible]
す。彼先祖ふるき薬皆價高き霊薬なり。その症より茶代
なしの前、先茶代の多少をきかむこと、遠近の富家危病と
なりの時は必彼をむかへて茶代に多く強あれども皆人救世の名医なり
と号敬を故に謝儀の礼物数百金を得て、家大に富ぬ。茶をあつら
ふに秘室の内にあつて親手これを製をゆゑに奇方と知る人なし。
原男鹿山は世界を離れ地にて、人の往ざる所なれば、翻冲富に
ゆゑ此地を好み、高崖の岩窟にをり、岩石をきりひらきて大
家を造り、後小数丈の岩壁あり、前ふ二重の高塀あり、樹叢

を植て造美麗なり。婢女奴僕最多し。家に又山井波門あり、
まぐれに姿をかへ諸國をめぐりて仇人をさがす。江戸を出てより已に三年
をへぬ。いまだ宿志を遂ざるゆゑ、椎又尚武に足をとゞむ。
此所にも翻冲あるさに書齋を造り、画壁好ぬれども鄙ふかき
べき絵師なく、此所をたゞさぬ居るに、偶波門がらく絵をかく噂を聞
家僕をつかはして家ふむえんをもとめ、波門路費ふ尽きる時なれば幸の
こゝ聞び速にうけひきて、翻冲が家僕とともに松ふ来る。男鹿ふ
に赴く。此日海上いとをだやかなれども、風波のうごきはなはだ
弱。飛来りて空より松中に井をとる。波門これをうけとりて髪
のもとれば、あやしみるに、翻冲が家僕うち笑ひ、此近辺ふ病死の
者あり、その人肉を奥の肉とこゝろえてさぐり来りし

のうんゝ許りつひに男鹿山にいる。両人岸によう。翻冲が家僕波門
とゝらびれて家に帰り。客室濁に通しおきてあるゆへにかゝる告。
波門は家とゝるにいと美麗なる大家なれば大医は大都会
なもあるこゝ紙なぞと。人中に驚るさるむる限り。良ありて陶の
紙門左右ふえゝ。翻冲ゆるぎ出て波門ふまる。波門暗に彼と覗
ひるに。茶綾子の袷きれに黒きさを眼と若を。年八十にをく色黒つぶ
と肥て身材まゝれてゐるしぞ。ゆゝあるこの婢女美酒嘉肴をさく
げ出ていとあつき食事をり。これより波門權は家にまりてあるゆゝが
好の絵とゝき絵り。已に別と告てさゝんゝるに。翻冲波門が旅塾
に通ゝるゝ式もし。ちひてさでむれば。ゝもむゝで又数日逗留し。時已
五八月十五日にいるゝ。波門今青ひるゝく眠らんこゝゝて一室

をいで。椽のうゝれついゐてゐる。明月皎ゝとゝゐる。鬼蟾精時を得
て。白日のごゝくゝゐれば又庭にゐるさち。かゝる成歩ゝて清光を堂しゐる
に。遥奥深所に小門あり。幸扉ゆゝゐてあるれば。ぞちに門外ふゐる不敢
十歩行てゐるに。式ゐるとゝべて岩石をきうひゝゐる平てゐうちに曲折てゐる
き一條の坂あり。凡二町ゐる上り平地にゐるてゐるふ。森漫る大海眼下
ふあり。一面の碧鏡を鋪るごとく。海水天ふつゝゐるて雲成ゐゝ。浪
花月れかゝれて巖とあゝゝ。遠山遥峯。平砂。曲岸。只一目凡波
ゝて手ゐるべうど思ふ。月ハ如ゐふゐのゝゐとよみゝ。松蔭の
好景。延蛍の苔屋と拭窃ゝてとよみゝ。象潟の絶境あも。事出へ
ゐるどと。波門ふゝうごゝて。權站ゐる知ふ忽腥風さゝ吹て鼻を襲
人の號哭声蚊のゐくやうに出。波門あやゝゝゐる不数十歩ゆきて

えるに。樹木のもゆるうらに小家あり。彼呻声ハ世裏にあれば益ゐ
やゝみ。窓ようゝ〳〵いとゝ月の光えうにやとゝ。窺ひえ視ば。さべて簀子
どんゝ。土間に十余箇の人枷拏とけられてゐゝび居ゝ。獄舎かとう
さびてゝゐ中にてえまバ男女小児うちゆゝ。皆身体全ゝぶる人ゐ。或
ハ耳鼻をそゞ目をくらん。舌を抜き。或ハ手脚の指とゝれ。七死八活只
苦痛にえぎゝて號哭声。いとゝ哀ゐ。又かゝるにハ白骨と接上。赤肉
を斬散を。婦人の肚を割ゝるもあり。小児の皮を剥ゝるもあり。人の腿五七
身ゝ梁に吊。五臓六腑を引出して一盤の上に載ゝね。鮮血涉川の如
に流。腥氣鼻をおをひてゝ〳〵。大暍后の彼門も此光景をえて。お
ゝ人ゝ髮もよ毛もよゝゝぐゝと逆立ぬ。和ゝハゝ。ゝがゝゝハ此如修羅
道ゐゝべ。我活ゐゝ地獄ハ墮ゝ〳〵と。ゝ〳〵呆ゝるゝきんと考ゐ汝

ゐハ何者ゝて何の為にかく苦ゝとゝうゝるゝと問。一人答て云我輩ハ皆遠
國ゝ活捉れ来ゝ者ゐゝ爰の賊医翻冲ゞ為に買ゝれかく苦ゐ
業の料とゝる。彼賊医我ゐゝとゝにしゝさみづゝ〳〵腹人の家僕とひ
き来ゝ。ゝゝるにのゝて我ゐゝ活肉を屠取その余乃人ハ家内妻
者もゝれゝとゐゝこゝかゝ。此故にかく世界とゝるゝ地とゝゝみて任
ゝゝゝ。彼ゐゝて蠻人ゝゝ一本の秘方を授ゝ凡人の身上の病に都人の身
上の物ゝ用て奇異の療治とゐゝと。耳目四體の症のごゝれハ。活人の耳目
四體を割取て薬に合せ五臓六腑の中に生る癰疽のこゝゝハ活人の五
臓六腑を割取て薬に合と。或ハ小児の胸を割て生膽を取。孕女の肚
を割て胎子をとるのゝゝひ悪鬼羅刹の所為ゝゝも是ゝ活ゐゝべゝ。
西人に諸国ハ脱人の夫ゝ捉ゝ。或ハ人を活捉。拐掣或ハ人買の手ゐ

索てかく集めん茶の料とも最全身毒疵の着ふあるざるバ用ゐとなり。
おん身もかどす。彼が為に茶の料とするぞ。急ぐ脱る計を思
ふ〳〵云彼門に入て益驚き。前日私中に弱のあるを人肉も試
所ろ〳〵去れるあり。宋代の女賊母夜叉孫二娘が人肉を屠ーよう
も尚遁にまぎれる。隠悪あり。ちつぶやれて言をまきてぞ抜それなるこの
殺人の摘のうちに二八ばかりの手弱女。雪膚あざむく白綾の袷ぎぬを
着て。ようーある人の息女もおかーきぐみどりの髪をあつ乱てぐんぶふ
ふ伏口裏に念仏をとなへて居るぶこゝに義みええりしハ彼つ泥さみに
てえるに臉ハ嬌花ふ似て眉ハ蛾柳のごとく涙眼ふ白玉をたゝ。憂を
帯き眼を稜の光景天人の五衰眼前にあるが如ーに美女唐錦の帕
に包てるあ抱しぶ此肉色〳〵けてうちゝ一面の鏡まろび抜ちゐ彼門

これを取てえるに背面に月谷の紋と松竹亀鶴を鋳付るれが大に驚
き此境ハ足三年以前我ようの稜稜丹下と云人に与へるあるこれを拾
るあん身ハ若丹下殿の息女ぶ憂児みてんうれしと云。英女も驚き彼つ
が報をつゝ〳〵えやりて。おるけるまゝ。郎ハ安西喜次郎殿ゝといひて西人
夢に美ゝうちしゝ。ようぶふ限ゝ色彼つ此ゝてふ事と細ふ泥ぐ〳〵ふ
しゝ云ゝ。ゝと技て人ふ死ふ。ふいるを扱ゝに擒者ー縁故とふ
つゝこのゝ〳〵泥ゝるハ茶の年父ゝ人郎ふ遇此境とゝぶさんて家ふ飯
足ゝるぐのゝとかゝる妾只郎ゝ宿志を遂ゝ月法まゝ此境を郎の
伴ゝとゝハ行ゝて先ふ身をたゝるさど已に三年ゝわしども霧ゝるも
郎の音信を聞ざしバ生死のゝぐもおぐゝるゝあけゝれ哭てのゝこつゝ
一日長谷ゝの観音に詣で郎恙ゝ本意をゝげふんゝとを祈願に

入りて帰りけるが途にて三四人の賊人に出合従者の男女尽く殺され。妾は轎子に乗ながら奪とられ。其よりあまたの人買の手に渡り十日ほど前此処に売れ来ぬれば此の主曾て婬に耽。あまたの妾をかゝへおきぬれども邊鄙の事にてかくまひける者を得ず日来これを愁ひ居けるが妾を一目みしよりふかく愛慕の心をおこし一命をあたへ七妾にまじへしと嚇り賺し責れどもいかで此身を羞べき。殺さば殺さるべしと心にはおもひさだめぶましとつよくいひはなちけるに彼がいへるやうこのごろ富家の女児難病をうけて我薬をもとむこれを救はゞ千金を得べし汝いよいよ心にしたがはざれば汝が生膽をとりて薬にもちゆべし心にまさにかくべきや。まことかゝるまじきや是より三日の間に心を決して返答をなすべしといひてさりぬ。已に今日は其三日のみつる日なれば翌は殺さるべし一つには古郷の父母をおもひ二つには夫に別て泉下の

鬼とならん事を歎といへども脱ぬ命なれば彼が手に死るならむ。自舌をくひきりて死んとおもひさだめて来世は此苦みのがれんと只一心に仏を念じて居たるに、かしら家にめされてかく物ありけれ対面をとげしに国はいづくの国といふならん知らぞ。人買の手にありてもふかくかくさるをみつれども、つひに此身をけがさず首飾衣服のたぐひはみな奪はれされど鏡を失はざる千辛万苦推量してたまへといひて悲歎の涙にむせびける。渡辺これを聞て扨も危き哉我一御おくれなば此身はしらん此古人そをなりけし二百余里の遠境にあるをめぐり不思議に来て遇。真是奇縁なりといひて悦び又おのれ陸奥に下りしより百千の折磨にあひ今はかくて仇人にめぐりあはざる事をかたり事已に急なれば今宵のうちに逃去べしとてかゝる技て舊の庭からたのむ

げふ〳〵ゆゑ。自己ハ一室のうちに去て。行囊包袋をとり
とさめて有り。扨逃出んとするに。後ゆゑ数十丈の岩壁あり。前
ゆゑ二重の高塀あり。逃出べきやうハなし。時に前年了然禅尼
のたまはされし八字の句。

得布而擒　得布而脱

とつるとたひ出し。今青の危急布と云て脱よりのとく人なるべし
とゝ中にうゐづき。幸衣服の料とて索なる一幅の白布。包のう
ちふあるゆゑいそぐ〳〵ゑ出して水に入て濡布とのて塀よりちゃけ。
波門ゑ〳〵と脊におひて布とつゝひゆらしじて二重の塀と越網
と漏る奥竜と離るるの思ひとなして一息吻しつきるゝ追手
のかゝらんこと紙おもれ。一時もとゝと又かゝることと脊にあひ。月影のみまよ

も遠よりと驚きさつて足紙空に走り。漸く二十余町逃のびてゆくと
ゑゑんは西ハ入江にて渡るべき仮あり。芦葦茫〳〵生茂り。只一條の徑路
ばかりなるとも浅きゆゑの人の声して。汝等走ることかうしとよぶ
とつゝよ多く火把を揮照して。苑ゑ〳〵追来る。是乃翻冲が家僕
等なり。波門ゑとゝろう嘆息しゆゑこと技て幕陰れゆゑ身をかくし暗
に頭をゑゑ出して後の方とかゝるに火把漸くにちゝぐさめ後ゆゑ数十人
の遠よあり。前ゑゑ森〳〵なる大江あり。更に逃るべうもあるとゝ。ゆゑ危け
とゝ。沼〳〵ありて裏に斬死せんとゝ思ひるれども。前ゑ大望と願ゑこゝに足
弱とそゝるゑひされば。脱るゝとけいとおしひるゝ。幕のうちとかけゑゑゑて
紙やあるとさゝよるゑ紙ゆゑ波門ゑゆゑつまぢゝて。爛泥のうちに撲地する。
かゝることゝきて扶起せば。波門渾身泥ふるておきのゝつまづきさ紙

拔とるに。船とつるべる纜うしなひ葦とゆ一今てつるに果て岸
丑一艘の猟船あり。天のさとけと晴びいとぞ〳〵くつろぎ岸技て船小
乗来。櫓をとりて漕去むとするに。船の只めぐるかくてゆ一も岸とこ
まとどこハもいふしとりくてもぞ。狼狽て綱とるぞ。波つ氣と焦燥と
拔て綱ときうとて。又櫓をとりてゐつぞ〳〵只むとゆに一町ばかり。沖の方へ
押出ぬ。波門ハ原房州小育海士の子ども船漕業とてゐひてかく
仙におぼえあれば。晩もあれまで漕て十余町漕去り。頭とうとてるるに
渡の岸上とのぞもバ数十箇の火把幕のうちに乱入紛〳〵て蛍の乱
ぶごとくなり。波つ晩のつくるけいとかときハめて漕ぐ。少刻も
行もて。船ハ江ふふつるるぞ。忽櫓ろきくとれて波門船中にふ
船底被もて水滑こと涌つぬ。これ船ハ原波検もるる捨小船なるなり

どもて素。櫓も又折るゆるあり。これ
あれ一村の要ゆ火。月色朦朧として暗夜なり。一陳の暴風さと
吹まるハどことあれ。高浪白馬の走るがごとく。孤舟紫燕の飛ぶ
似て。或ハ沈く或ハ浮く。水ハ底より涌り涛ハうとり打こく。忽船渦
まくうちふおちうて。猛石の汁のごとくにえぐれがかるとハ只眩転て活
ふこうちもなく。舟梁にとつきて命のとまるとまつのみなり。波つ嘆て南
无大悲観音薩埵。我掌と乗ゐハどれ一命と救ハせ給へと念じ。普門品
を声〳〵やうにとなへつ。眼とくにて居るる船小風まくごとくおろし来て船
とゆとあげゆり沈ゆ。巖に撲地うちつけてぴひふ微塵れ砕こと看
波上に散乱と。波門ふくとるるとおどろきて品の上に発上り
らこと手とうて引あげりるがやがて巨浪巖にうちあげて。二人とまるて

ゑきかゝ〜ぬ。波門胷水練に達〜〜れば。水とゞこをて浮ゐいでかゝ〜こと
と抱ひ。ふ〜び品にゝらのぶり。彼とゝろに松中の銀若丸神帆乱
〜〜人。今又水中に没〜〜れば。渾身水のごゝく冷てあ〜あ〜も綵きれ
ゝゲ。方不穏〜〜あきぐるんのうちで痛ひき。波門ハ只呆〜て。一度に氣力
ゝゝゝゝるゞ。ちひて志を励せひ〜品の上にあゝてん行てんも仮の。幸
風もやゝ〜ごん。射岸もゝどちゝけまべ。ゝゝく水とゝえゆん。陸ゐ上ゝ
てゝゝゐ抱もゝゝんゝゝゝゞゐ。衣服とぬぎて赤裸〜ゝ。包裏
ハ水中に考ひ〜ゝゝゝ鏡とゝゝて行囊ゐ井〜ハ。衣服のうちにつ
みて帯と以て。両刀〜もに脊上にゝゝゝゝつけ。かゝ〜こと
左りにゝゝゝゝみ。水中に飛入て片手と以て水掻きゝ。浮つ沈
つゝゝゝじて。對岸に泳つゝ。ゝゝとかゝあげて猶ゞゝんふゝ〜も

按腹〜て水と吐せむ〜〜。四耳に口よせてゝびゝくせど。更にそのゝい
あるゝゐ。波門死骸ゐむゝ。ゐん身いゝゐれだゐく薄命ゐ。ゐ空
の遠境に擯来てゝゝゝども考ゝぐゝ遇。一度火坑とのゝし出てふ
ゝび水底に命をゐゝを。我病志とゝげて後。男丹下殿ゐ遇て
何ゝいゝん。便ゐ老の身乃果やゝ。天に號地に哭て。ゝゝ〜ゝ乱
ゝゝゝゝ。ゝゝる義の叫ゝゝゝ海中の鮫人も涙ゐ尼して腸ゐゝくく。用
もゝてゝゐる光景ゐゝ

第十條

脱虎穴避龍潭波門報仇事
并榎本其角復花之句事

波門やゝ病とゐゝ。支急ゐゝて忘ゝて。前年了然禅尼零陵甦
醒香とゝゐゝ。後日必ゝちゝる時ゐゝんとゝゐゝゝ正是世時ゐ。

まどろみしは今尚らにあれば。やゝ人家あるところにさへぞ去てば
名香の奇特とらんと頭をうち入て後とらんとすれば。遥なる林のうちに仏
堂あり。いそがはしく濡衣が両刀およびの死骸を背におひて。かしこ
に走りつきて見れば。堂のうち暗くして物のあやめも知らねど。死骸を坐
上れかしこを見れば。火打袋を取出しられば。火口ぬれて火のうつるべくもあら
ず仏前に香爐丸火やあると手してさぐるに香爐はあれど原は堂人絶
えて久しければ蓋を。爐中はさづられ冷灰のことなり。ぜんかたなく外面に
出て見れば時しも彼岸の咲乱れたる尾花。風につれて人を招く波の猛
然として打ちつき。尾花をあまた折とりて一束にし。ふたゝび火燧をとりて
打かくれば火忽尾花にうつりて。燃えて燃あがりたれば。心うれしく。松の小枝
をおりくべて。死骸をあたゝめ。且香爐に火をうつして。かの霊香をさ

死骸の額にさしつけしれば。奇なるかな妙なるかな頽郁たる香氣鼻中に入ると
ひとしくかの死骸忽眼を開き。只夢のさめたるがごとくに甦醒あ
おきさかり上り。元気平日にかはることなし。彼門太はよろこび。窟洲の返魂
樹。祖洲の不死草すらも。遥にまされる奇特なりと。名香の霊験
且禅尼の道徳を感じ入りかくて両人濡衣とおぶり。堂の縁ふ居
かけて権心氣のつかれとやすめけるが彼の偶あふぎて額をのぞく
普通の二字あるを見て云哉八房別にまれて深く那古寺の観音
を信ぜよかし身は大和にまれて長谷の観音を信ずるとばいへ。此堂のみ
かゝけも観音なり。念ずる所にその地と異にせしくへ。諸仏原
一体なり。されば我身これ来て甦醒せしもこの名香の奇特かるべし
かゝる且八犬の擁護によるなるべしと。両人信心いやまして。仏前に

額一くわしも堂の隅より女人のあやしき男こう　こを出。一言といえどもつとりて左右より。波つまちくし組つきん。波つ不ゑと出そうくと
つゝど。原早業の達人すれば。元しあがら女人とさく。呀と一声叫び
つ。堂下ふ撲地投つけくら。一人ハ水盤に頭とうくれて忽死と。一人ハ
氣絶して動くぶしば。波つ堂下に飛りて。さくへんと。くふ。又堂中
より女人の男刀を揮てとぶり出。女刀一度に斬蒐。波つ電光のごく
刃を閃てこれを避まば。両人の刀つくぶくに空を斬。その隙に波つ手
快両刀を引拔なゐに揮て二人を迎。ときまりあく閃来る両刀をう
けくら。飛多のごくくたくく形ふ。前に投られる二人。漸く息絶ふき
入しよりきて這より。波門が足にしりつきて引倒むくと。波ついと
ぶくさくちんこれとえてやく一脚をあげて急處を蹴くれば。

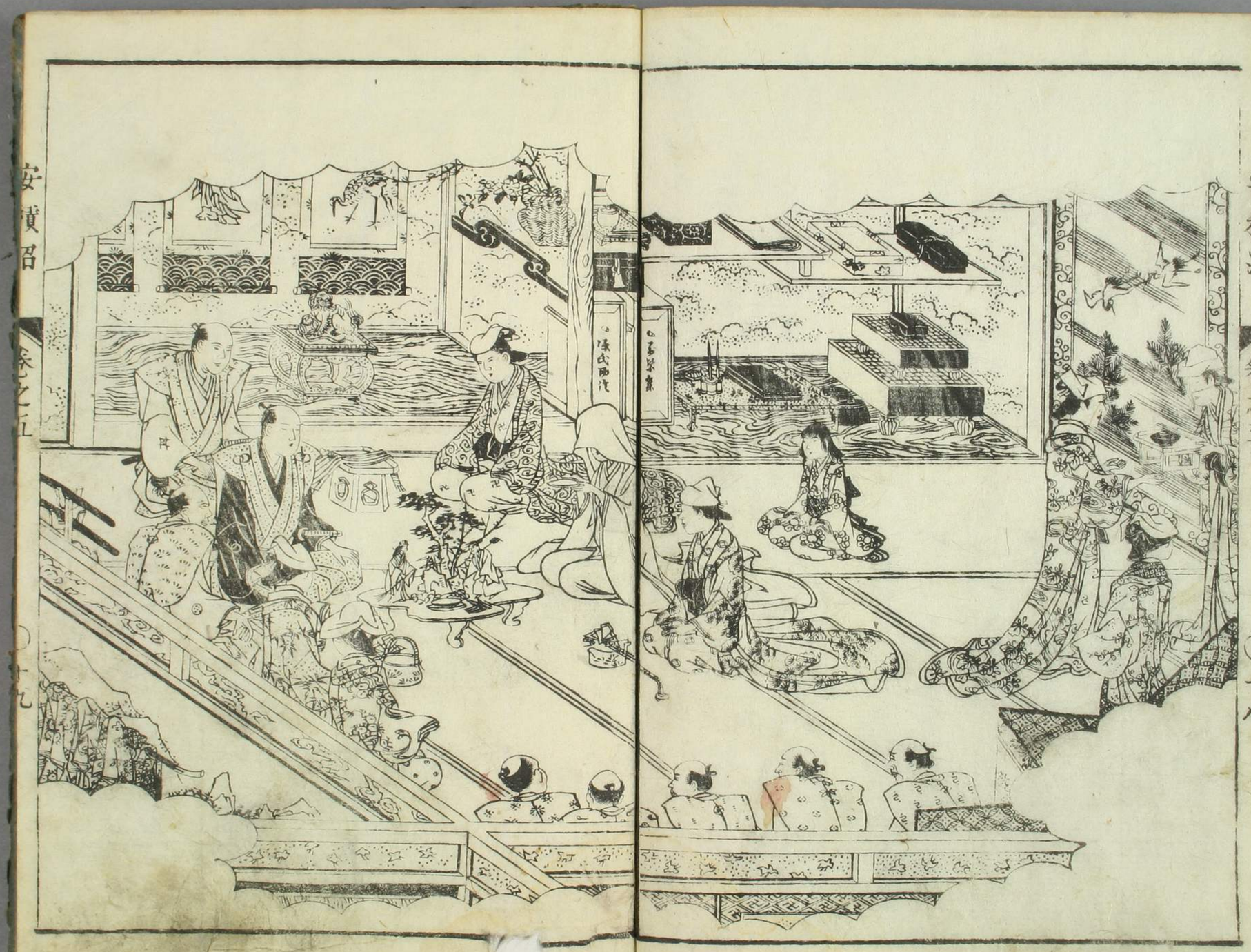
忽血ゝ吐てぞ死くくくり。後の両人今と際に猛勢を奮くく
ぶもいくぶく敵くくこくあくふべき。逢とくくて逃むくくる。波つ飛く
くて女人を右と左ふ斬くふとぶ打くくも堂中の戸帳のくちくる。おつぶ
とよ裏劔。波門が面上ふ飛来るとやく刃を閃て避れば。肩尖と
擦て後辺の松ふくくくと。波つ却ぶえど危式くくぶうつ。戸帳の方
とえやりくくくあくまんて立くる。勢ひ猛ぶええくる。時に忽戸帳
さくゑけ。丈くくさ大漢子旅の装束をあ長剣をあぶく。後くくて
歩くいぶぬ。前にくれをくる火性消ぶてくるれば。波つ火ぶにこの
人をくるに。これまぶくべうもあくぬ仇人雲平ありれば。ぶとぶくて
呼び。名づ已や裏雲平。汝ぶくあふれる安西喜門ゲ一子喜次郎。
今変名して山井波つと名告。我幼時をつぶも汝よくえ知つくん。

汝ぬぐりたりん為。身は万里に漂泊し。心は百折千磨に労
を。已に尽いてうたてあはれ。盲亀の浮木を得。優曇華咲ひ
らくとなるが如し。只速に彷徨せよ。いひて。刀の瓦をさぬかん
し。拳をあげて力足を踏られば。雲平呵々とあざみ笑ひ。流ちう
ごろ蒔田翻冲ぬ身をよせ。薬の料をもとめんとて中国に赴さ。ふ
たたび飯る途中ぬて。ゆ下の者胡擅五郎。鰊八。鶏二郎。鶴二郎四
人ぬあひ。このごろ翻冲が家ぬ逗留せる若人諸藝ぬ通じたる者
とかたらひ。ゆ下にまやられんとすれば汝がごもやうにより似たりつゝ際
ちび速に殺して後の恥をすぶんと。飯酒をとゝぐ処ぬ。ぬて日
をくれ。夜中厠の便をけまべば堂中に入海風のさむさ。いとひ戸
帳のうちぬ臥て。一夜をあかさんとせれ。汝自ら来て我れをさぬ

せんぬ。汝が運命のつくる処なり。我藤路のつれぬ熟睡し。四人の
ゆ下と共ひ。ここを送ぬ。そ彼なる女も我よりも翻冲に貴
ふ。いいそ。ひまに奏ぬ我房列の観
音堂にて汝が雪中に死んとせし我救ひ。今又世観言坐ぬて汝を
殺さんとぞ。あづ夢ぬるりの我なるがごとし。いでゝ友撃ぬとべきぞ観
念せよといひて。椽の板を踏ぬして堂下に飛り。刀を抜て斬ぬけ
り。波門のぞむ所ぞと力をまゞへてれ用。二人の剣術は一来
一往一去一回用已に五十余合ぬ及べども。いまだ勝負ぬ成らざるに。
猛烈なり。ゆ下こは前ぬごとく。波門が身をあやぶく氣ぬあせり
いつもむなしく後ぬうきぬ居たり。雪平は身材六尺にして相貌
悪ぬり。波門は今年十九才の風流士なり。立ちゝびてゆ武限の松ぬ年

あるの木萩ありしいくども弱能強を制するの理なて雲平ゞ強力もく
りて波門が早業に勝ぐらくぞなそうるかくて雲平勢ひにつさてうつ
太刀を波門た辺みうけ流せば雲平が刀にあまりて石の水盤に斬つ
くるに石火ぱっと花散て水盤の角をきりつり水さし流れ出て燃
のこりる燒火とけし忽に暗夜となる両人ハ只刀の光りをもとにつ
いぐるに空と斬波門を暗中かつらを身をあやぶきかつくこと波つ
ぶ身にたのくまちあんをみそれこの人身死をもあ拔ぬし声と思息を
呑かこにあるいれこにかくれ時平ゝとぐ人をきが如し波門仏中に
一計をもぐ刃を松の木に法みしせ一声叫れば雲平こを声をんあてに
ちづあ成波門をやく一刀をあげ骨も斬よを折れば雲平肩尖
より膳をうけて両段にうれ地とに撲地とふれうこちよきを景

あり此時一ゆ雲それて敵門ふくびかやきれば波つりくこと部屋金
ろこぶゆ限あり拙波いとく前ゝ雲平語て石盤を斬ろ
しハ我家の宝刀交剛大功鉾に疑かしを雲平が力を把門の光りに
ようくえれば果して彼剣をれば顔ゆさげて収ゆしも数行の賓雁
嘹喨とまて空をくぶ波つあふぐえて古かうれし昔漢の蘇武匈奴
に使ゝ十九年困ゝ舊跡ハ彼男麻山ありと字ちるに雁の書を以
て古々に飯ることを得ろ我も又男麻山の危急をのがれ
ま婦一所ふありて仇を報古々みゆ飯ることを成ゝ蘇武ゆ生
きれる高運あり汝雁仏あくば我ゝ前ふ山古事を古々みを告よ
とこ立ちごちて只ゝ雲ことびにくざりる抑雲平彼名剣を奪
しハ原金にくん為ゝ世にまれる剣をれば出所をあやぶきて


安積沼
卷之五
十七
十八

買人ありしうち。弟左九郎小平次が寃魂のるに死しられば。己が身
よも妖祟あんこしをかそれ幸彼剣妖魔を避る奇特あるべし。表
裝とゝのへ若枝うつ。身をそなさど帯居るうそかくて彼い彼名
剣を以て雲平が頭を刎彼う衣服の袖をとゞさちぶりてこれと色
如刻沙仏をあつ拜拝ろうをを扶をを人孫あ易をさして走去ぬ
又彼翻冲が隠悪も世間あられて罪せられとゝん。爰に又小鰐小平次
が寃魂。安積沼ゐでまりて人民をあやまるが。一年了拭禄尼松浦
遊覧のうるさ彼沼ゐいう。教解をあ。ゐにうふ平次が霊仏果
と得て再妖祟ゐるこゝの。彼沼今いうぶうにかうちのこ弱りて余地皆
新田しあ仏。び辺に小平次新田しつ又の弱りしゝ世ゆくぞ又小平次
ゝ子小太郎。成人のゐち俳優の業に達一ぶ諢の名人とあり

ろが。父小平次が悪西亜の所為とゝあて。仏道を信じ。身ハ俳
優あるゝんハ生家のめ。朝夕数珠をとゝあさどゝ念仏をとゝあ
くしられば。時の人彼が諢名を坊主小兵衛とゝて。晩年にいう了然尼
の弟子しありてついに出家とゝげられば。時の人又小兵坊をとゝぼぬ其
比榎本其角がとゝぶある句あり。

坊主小兵小兵坊とゝ復花

此句五元集にゝえゝう。又山井波川雲平が首級をとゝさゝて
房列にいう。父の墓にゝあて霊をあふりゝぶちに復松とゝあて
らゝゝもに大坂に芝居。大和小ゝうしば。穂積夫婦ハ泉平の
人の森素しうゝとゝあ。吉日を以て婚儀をとゝさゝめ。穂積波川
し名告しむ。西人父母に仕へて孝をゝ尽し。夫婦の情益厚くつひに

男二女と生れ。ともに男子に安西の姓と名告せて。実父の家を
起し。夫婦ともに長寿をゑ。子孫繁茂して富栄なるとかん。
都是波川が孝義の全さ皇天に通じるが如きあるべし。原変
川が絶画赤縄と惹にして良縁あり。真是一場の奇遇なら
ずや

安積沼巻之五畢　大尾

醒世老人山東先生著作

○忠臣水滸傳　前編五冊。後編五冊。前年発行

同著作　假名手本の浄留璃を。水滸傳にもどきて。繪入の讀本なり

○骨董集　初編二冊追加一冊合本三冊近刻

此書八二百年以後。聞人の傳。并に肖像。珍書。奇画。古製の衣服。
雑器の類。花街。雑劇の古風等。諸家の秘蔵に索。数十部の
珍書を引。自の考をも加へて。事を記し物を圖しる漫録。尚古の
書也

朱子讀書法　清人覚世道人傳方。椿寿斉拜田信明製。一包壹反五分

○氣をとゝのへ。心をしづめ。ものをよく思ひ。ものをよく見て。
○はれつゝてゆくこと人見てよし。○学ぶ辛労をいとはず。
ものゝ味ひ一粒みて奇特なり。○小兒ゑんむしのうへ一名の茱萸
丸　○きのくすりの人老若男女にかぎらず。腹痛
○瓦草二文　○半包五文

賣弘所　江戸小橋
山東京傳烟草入店

山東先生。岳瀨氏。本姓、拜田。名、田藏。字、伯慶。一號醒世老人。舍東都洛橋南朱提街。恒著稗說。以寓詼諧。舉人呼京傳子。邱孩巷頃靡弗口之。而若其名氏。間亦有弗諳者。因詳標榜編屋云

東都書舗　偃鶴堂小林近房謹誌

享和三年癸亥冬十一月發兌

○内藤於ゑ仙女香一包四十八文○黑油美玄香　江戸呉服南鍋町　坂本氏
○金匱救命丸江戸林氏製　ゑ次所　弘所　江戸　大伝馬町二丁目丁子屋平兵衛　元旅田町中橋ゑ屋清右衛門

發販
書行

京都　河内屋藤四郎
同　大文字屋仙藏
大阪　河内屋太助
同　河内屋直助
同　河内屋茂兵衛
江戸大傳馬町二丁目　丁子屋平兵衛板